

情報解禁 2025年1月15日(水) 15:00

アタック・トーキョー株式会社

報道関係者各位

渋谷慶一郎の 안드로이드・オペラ、最新シングル『BORDERLINE』本日配信開始
AI 作詞で 안드로이드が歌う“人間の痛み”を表現する楽曲とは？！

アルバム『ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR』：2/21（金）配信・CD 発売予定



2月21日（金）に発売が予定されている渋谷慶一郎の 안드로이드・オペラ初のアルバム『ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR』に先駆け、第二弾シングル『BORDERLINE』が本日1月15日（水）から配信開始。本楽曲は ChatGPT が登場するより以前のバージョン GPT-2 時代に AI 作詞の電子音楽として制作されたが、안드로이드オペラのために編曲が重ねられた。渋谷による繊細なピアノとストリングスが幻想的に響き合う中、안드로이드は「痛みは私たちの人生の重要な一部」と歌い始め、「かつて愛したあの世界はもうあなたのものじゃない」と締め括る。渋谷が2012年に発表した人間不在・初音ミク主演のヴォーカロイドオペラ「THE END」以降活動の中心に据えている、生と死や人間とテクノロジーといった境界を無効化するようなコンセプトが具現化された作品である。また象徴的なモチーフ奏でるストリングスを始めとするオーケストラは、人間ではなくソフトウェアシミュレーションによって作られており、このアルバムでの唯一の人間による演奏—渋谷の繊細なピアノだけが、世界の終わりに対峙する人間のメタファーとして存在している。

ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR
KEICHIRO SHIBUYA



【関連リンク】

シングル『BORDERLINE』（1月15日配信開始）：<https://linkco.re/bUxedha1>

アルバム『ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR』（2月21日配信開始）：<https://linkco.re/67huCCrD>

안드로이드・オペラ パリシャトレ座公演：<https://youtu.be/5YIC3ziNID0?si=ISCSujzkioOIYryx>

안드로이드・オペラ Abema ドキュメンタリー：<https://youtu.be/Wz9eSmTrg7c?si=-aKteyOFrmyrbB2Z>

◆AI (GPT-2) によって作られたアンドロイドが歌う歌詞 (全文)

BORDERLINE

作詞：GPT 作曲：Keiichiro Shibuya

GPT-2 プログラム協力：東京大学教授池上高志氏

英語	日本語
Pain is a vital part of our lives and part of developing a special set of senses A perfect way to treat pain as a whole is by doing what we love to do and find our true self But for some, pain cannot be considered as a source of discovery since it can just complicate matters going forward The world you have once loved is no longer yours. But that is the very song that haunts him night and noon... Let him will! In the midst of his madness, his voice rises above the noise of the sea and the storm It is the song he sung for her in Galle How long a time has passed since that summer afternoon and sunset, and his voice That not happened on better ears than those of the voyageur Pain is a vital part of our lives A perfect way to treat pain and find our true self The world you have once loved is no longer yours BORDERLINE	痛みは私たちの人生の重要な一部であり特別な感覚 を育むためにある 痛みを癒す完璧な方法は自分の愛することをして 本当の自分を見つけること でも、痛みから何も気づけない人もいる それは未来をただ複雑にするだけだから かつて愛したあの世界はもうあなたのものじゃない それこそが彼を昼夜問わず悩ませる歌 彼の意志を解き放て 狂気の中で、その声は海と嵐の騒音を超えて響く ゴールで彼女のために歌ったその歌 あの夏の午後と夕日からどれほどの時が経っただろ う その声は旅人の耳に 誰よりも深く届いていた 痛みは私たちの人生の重要な一部である 痛みを癒し、本当の自分を見つける完璧な方法を見 つけよう かつて愛したあの世界はもうあなたのものじゃない BORDERLINE

◆アルバム『ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR』について

今年6月に東京公演を終えたアンドロイド・オペラは、AIを搭載したヒューマノイドロボットが最も人間中心主義的な芸術様式ともいえるオペラと融合し、オーケストラと共に演奏する舞台作品。これまでにオーストラリア、日本、ドイツ、中東、パリなど世界中で上演され、初のアルバムとして2月21日（金）に発表される本作はオーディオワークとしてオーケストラアレンジ、ピアノ、電子音、ヴォーカルに至るまで新たに再構成される。

公演では人間が演奏したオーケストラパートも、今回のアルバムでは終末的な世界を表すコンセプトを研ぎ澄ますかの如く最新のソフトウェアシミュレーションによって作り直され、その上にアンドロイドのシンセティックなヴォーカルが重ねられる。唯一の人間による演奏—渋谷の繊細なピアノは、世界の終わりに対峙する人間のメタファーとして存在する。アルバムの冒頭を飾る『MIRROR』は、渋谷が描く“物語”を象徴するような楽曲で催眠的なドローン、緊張感のあるリズム、そしてオーケストラの流れの中に詩的でロボット的な発声が重なり、「存在と非存在の境界とは何か?」「過去と未来の境界はどこに存在するのか?」などと問いかける。『Scary Beauty』では、フランスの作家ミシェル・ウェルベックの「ある島の可能性」から引用したテキストが用いられるなど様々な要素が交差する。

アルバム全体を通して記憶に残るアイコンックなテーマ、実験的な電子音楽のモチーフ、そして壮大なネオクラシックのフレーズを織り交ぜながら、哲学、宗教、文学、芸術、技術に関する問いを投げかける。

◆アルバムコンセプトテキスト

人間はわたしだけ—『ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR』について

渋谷慶一郎

西洋音楽は人間中心主義で出来ている。

ここで言う西洋音楽とはヨーロッパで発祥したいわゆるクラシック音楽、オペラから英米で発祥したポップミュージック、ヒップホップまでの全てを含む。

優れた歌手や指揮者と演奏家、ポップスターやラッパーがステージの中央に君臨し、そこで歌い語られるのは人間の生や性、愛と死と言った人間の物語であり、それに熱狂、恍惚とする聴衆という図式は数百年変わっていない。

しかし実際の人間社会は特に21世紀に入ってから様々な限界を露呈して終末に向かうスピードは加速しているように見える。この状況で人間中心主義による人間の物語に固執するよりは、違う可能性を模索する、もしくは人間後の世界を夢想する方が、この終わりに向かう世界に対する処方箋、ヒントとして有効な気がしている。

世界は刻々と終わりに向かっている。アンドロイドオペラはその終わりと終わりの後の世界のバリエーションをAIを搭載したアンドロイドが人間のオーケストラを率いて歌う。

仮に世界が終わっても、そのプロセスと終わりの後の世界が美しければいいじゃないか？それを想像してアンドロイドとAIという終わらない進化を続ける存在が人間と一緒に世界の終わりと終わりの後を歌う。歌詞の大部分はGPTによって生成され、例外的にミシェル・ウェルベックとヴィトゲンシュタインの著作の断片が歌われる。

この作品はパリ、東京、ドバイといったさまざまな都市で公演してきて、その度にオーケストレーション、エレクトロニクスのパートのバージョンアップを試みてきた。そしてアルバムをリリースするにあたって、オーケストラとライブレコーディングを試みたのだが、その結果に私は満足できなかった。

人間の歌手の代わりに人工合成されたシンセティックな声を持つアンドロイドのヴォーカルに対して人間のオーケストラによるライブレコーディングはあまりにも不完全で「終わりのシミュレーション」になり得てないと直感した。そして様々な試行錯誤と検討の後に辿り着いたのはオーケストラのパートを全てソフトウェアに入れ替えることだった。現在のオーケストラのソフトウェアはシミュレーションという意味では極めて高いレベルに達している。実際、耳で聴いて生のオーケストラと判別できる人は稀だろう。その中でも最高峰と思えるクオリティのオーケストラシミュレーションのソフトウェアを選び、スコアを改訂し全てのオーケストラパートをデジタルデータとして生成した。

そのデータをパリのスタジオで全てアナログのミックス卓に立ち上げ、人間のオーケストラのミックスダウンと同じようにEQ、コンプレッション、ディレイなど無数の処理を行いミックスダウンをした。同じスタジオで友人のミックスエンジニアであるフランソワとライブレコーディングによるミックスダウンの断念をしてから1年近くをかけてその作業は続いた。

つまりシミュレーションされた人工的なオーケストラのサウンドを通常人間のオーケストラや歌手が行うのと全く同じプロセスを行うという矛盾でこのアルバムは出来ている。

そして音楽が世界の終わりのシミュレーションである以上、サウンドの核となるオーケストラが人間のシミュレーションであるという共通項を持つことは奇跡的なバランスを生み出したと確信してミックスダウンは終わった。

アンドロイドのヴォーカルは複数の声をミックスして出来ていて、人間のヴォーカルに劣らない情報量と人間とは違ったエモーショナルが存在しないロマンティズムを目指した。オーケストラを人間から人工に変えた後で、その声は全面的にエディット編集することになった。

そしてピアノのパートだけは作曲者である私が全曲弾いている。

つまりそれが唯一のリアルな現実として音楽の中に存在している。

人間は私だけ、というのが世界の終わりに対峙する極北だとすれば、それがこのアルバムのコンセプトであり、「私」はこの音楽と対峙するあなたにもなり得るのだろう。

人工的に生成されたアンドロイドの声とオーケストラ、エレクトロニクスの中で最後の人間を表象するピアノは浮遊するように、しかし確実に存在しているのが聴こえると思う。

◆リリース詳細

アルバム・タイトル：『ATAK027 ANDROID OPERA MIRROR』

レーベル：ATAK

発売日：2025年2月21日（金） 配信・CD同日リリース予定

Composition, Piano, Electronics: Keiichiro Shibuya

Text: Keiichiro Shibuya (#01) , GPT (#03,05,06,07,08), Excerpts from “The possiblity of the island” written by Michel Houellebecq (#02, #09) and “On Certainty” written by Ludwig Wittgenstein (#04)

Android Vocal Production: Keiichiro Shibuya, Shintaro Imai

Text-to-Note Programming: Takashi Ikegami (#04)

Mix, Piano Recording: François Baurin (Hinterland Lab)

Mastering: Rashad Becker (clunk)

Score Notation Assistant: Hiroto Kikukawa

Artwork: Ryoji Tanaka

Photograph: ayaka endo

Production: Natsumi Matsumoto (ATAK)

Produce: Keiichiro Shibuya (ATAK)

第二弾シングル・タイトル：『BORDERLINE』

レーベル：ATAK

発売日：2025年1月15日（水） 配信限定

Composition, Piano, Electronics: Keiichiro Shibuya

Text: GPT

Android Vocal Production: Keiichiro Shibuya, Shintaro Imai

Mix, Piano Recording: François Baurin (Hinterland Lab)

Mastering: Rashad Becker (clunk)

Score Notation Assistant: Hiroto Kikukawa

Artwork: Ryoji Tanaka

Photograph: ayaka endo

Production: Natsumi Matsumoto (ATAK)

Produce: Keiichiro Shibuya (ATAK)

渋谷慶一郎・プロフィール

音楽家。1973年東京生まれ、東京藝術大学作曲科卒業。2002年に音楽レーベル ATAK を設立。作品は先鋭的な電子音楽作品からピアノソロ、オペラ、映画音楽、サウンド・インスタレーションまで多岐にわたり、東京・パリを拠点に活動を行う。
